

研究型大学の国際化 ―学術追求と国際化推進の接点と狭間 (東京大学を事例として)

船守 美穂 (東京大学評価支援室)

東京大学は、2020 年度までの国際化推進の重点施策と目標を体系的にまとめた「東京大学国際化推進長期構想(提言)」(以下、構想)を2010年3月に発表した。文部科学省「大学国際戦略本部強化事業」(2005-2009 年度)の4年半にわたる調査検討と議論に基づく。

構想策定作業を振り返りつつ、研究型大学における国際化のあり方について考察する。

「大学の国際化」とは ―議論の出発点と終着点

構想策定のための検討は東京大学における国際化のあり方にかかわる議論に始まり、それに終わったと言って過言でない。「国際化は手段であり、目的ではない」という基本認識から議論はスタートし、「学術最高峰の大学を追求する上で必要な国際化は何か」、という検討を綿々で行った。東京大学における「教育の国際化」、「研究の国際化」、「大学運営の国際化」とは何か、執行部、国際担当や国際活動にかかわる教職員、教職員や学生が求める国際化は何か、東京大学が直面する国際化の現状と課題は何か、など。それら検討を経て、国際化に関する一定の認識が関係者間で形成された(「東京大学国際化白書」、「JAHER2009 発表要旨」等)。

しかし、気がつくとも議論は振り出しに戻り、国際化が目的と化している。留学生比率は?外国人教員比率は?英語による講義数は?学生の海外派遣数は?など。新たに議論に加わる人々だけでなく、事務局で初めから検討を行っているコア・メンバーまで、知らず知らずのうちに認識が元に戻るから恐ろしい。

国際化が目的と化している、と最も鮮明に気づかされるのは、「大学の国際化」の議論を教育研究の現場に当てはめようとするときである。東京大学では構想策定において、学内26部局(15研究科11附置研究所)に、各部局における2020年までの国際化推進の構想の策定を求めた。教育研究を担う部局の活動があって初めて全学の国際化が実現できる、という考えに基づいている。各部局の日々の教育研究活動に根ざした、生き生きとした国際化に向けての取り組みをみると、認識が新たにされる。

以下に、「大学の国際化」の一般的な認識と、教育研究の現場である部局から見た国際化を対比させながら、研究型大学における国際化のあり方について議論提起したい。

「大学の国際化」の一般的認識

「大学の国際化」に関わる固定観念はぬぐいきれないものがある。国の政策文書において使用される用語がもっとも端的にこれを示しているため、これを紹介する。

表1: 「大学の国際化」に関連して頻繁に使用される用語(国の政策文書等から)

<p>■ 国際競争力</p> <ul style="list-style-type: none"> 世界トップクラス研究拠点 世界大学ランキング 国際的な科学賞受賞者 各国の高等教育に対する戦略的取組 論文数、論文被引用回数シェア 外国人教員、留学生の割合 英語教育、英語による学位取得コース グローバル人材の育成 研究環境の国際化 	<p>■ 国際連携・交流、国際展開</p> <ul style="list-style-type: none"> 国際的な大学間ネットワーク 留学生交流、学生交流・派遣 国境を越えて提供される高等教育 海外分校、eラーニング 教育連携、ダブルディグリー 国際活動の戦略的推進 国際協力プロジェクト 	<p>■ 人の国際的流動性</p> <ul style="list-style-type: none"> 教職員、学生の国際的流動性の向上 外国人教員、留学生 研究者の派遣、海外留学 海外大学学位取得者
<p>等</p>	<p>■ 質保証、国際的通用性</p> <ul style="list-style-type: none"> 高等教育の国際的な質保証 国際的に通用する高等教育 国際的に魅力ある大学教育 	<p>■ 国際発信</p> <ul style="list-style-type: none"> 国際的な情報発信力 国際的な情報ネットワーク

[注]用語の抽出および分類は任意である。分類において重複もあり、また、用語のレベルも異なる。

用語の多くは、国としての国際競争力の強化を強く意識したものである。国際化が進んでいても、これら用語に関係の薄い大学も多いだろうが、東京大学のような高度研究型大学についてはこれを満たして、あるいは追求して、当然と思われる。

教育研究の現場における国際化

東京大学の26部局が記述した「国際化の方針」と「国際化に向けての取り組み」を大胆に教育・研究のタイプ別に分類し、整理したものを表2に示す。

表2：教育・研究のタイプ別、国際化の考え方とアプローチ

研究対象別	■日本研究 (日本文学, 史学, 法学, 教育学等)	■外国研究、地域研究 (外国文学, 人類学, 社会学, 教養等)	■グローバル研究 (地球科学, 農学, グローバルな課題解決(人口・食糧等)、哲学)
	 世界の日本研究者を魅了 →日本研究の国際拠点への発展 →世界の日本研究者の受入	 在外研究、外国人教師受入 多様性の追求、深化 →多言語・多文化主義 →国際連携による多様性の認識の深化	 国際的チームによる研究推進 グローバルな枠組みの形成 →大型国際共同研究 →世界に向けた政策提言、新たな世界観の提示
研究の実践性別	■基礎科学 (理学, 医学, 薬学, 経済学等)	■応用科学(国内中心) (法学, 教育学, 経済学, 工学等)	■応用科学(国外, グローバル) (工学, 農学, 医学, 薬学, 経済学, 公共政策, メディア)
	 世界共通の学問体系 国際競争 →英語による研究活動、国際的な研究環境 →世界的な研究の実施、国際拠点形成 →優秀な人材の世界的争奪戦(奨学金確保、処遇提示等)	 世界共通の哲学的側面を海外に学ぶ 国内と海外の事例の国際比較 →海外留学(若手の間の) →国際比較研究	 現地に適した応用研究、実践 現地における活動基盤形成 →国際共同研究 →パートナー機関との提携、海外拠点設置 →海外における実践、途上国協力
育成する人材のタイプ別	■研究者養成(基礎科学) (理学, 医学, 薬学, 経済学等)	■研究者養成(人文社会) (文学, 哲学, 法学, 教育学等)	■教養人材の育成(教養)
	 国際的に通用する研究者の養成 →英語教育、アカデミック・ライティング、コミュニケーション →国際水準の専門教育(海外留学、論文共同指導、共同審査体制等) →国際会議における発表機会、海外大学訪問	 専門性が高く、研究コミュニティ内で通用する研究者を養成 →在外研究、海外留学 →アカデミック・ライティング(日・英・諸外国語) →国際比較研究 →新たな世界観の提示	 国際性の涵養 →外国語教育 →異文化理解教育、国際的視野の醸成(日本/アジア/世界理解、グローバル・ 이슈等) →学生交流、サマースクール、異文化交流
	■実践的人材養成(国内中心) (法学, 経済学, 教育学, 工学等)	■実践的人材養成(グローバル) (工学, 農学, 公共政策, メディア)	
	 日本社会の国際化に対応できる人材の養成 →バイリンガル教育(日英) →外国語制度の学習 →日本と外国の制度の整合性に関わる検討、調整実践	 国際的に通用する人材の養成 →英語教育、コミュニケーション力 →問題解決力、企画力、チーム力、リーダー教育 →国際的視野、グローバル・ 이슈 →現地実践教育、海外派遣	

[注] 教育研究のタイプは、国際的な特徴が際立つように分類したものであり、一般的な分類ではない。また、複数のタイプにまたがる学問分野もある。

「大学の国際化」の一般的認識と「教育研究の現場の国際化」の接点／離反点

表1と表2を比較して気づかされることは、表1は表2の項目をほぼ網羅しているが、表2の各教育・研究のタイプ別に見ると、表1のすべての項目に対応しているタイプはない、ということである。つまり、表1の項目は学術の追求に密接に関係するが、全ての項目を追求する学問分野はない。

また、同じ項目に関係していても、関係の仕方は教育・研究のタイプ別に異なる。たとえば、外国人教員を受け入れる場合、1) 日本研究では、世界の日本研究者が受入れを希望して来日するが、2) 外国研究ではもっぱら、当該分野の知識・情報入手のために外国人教師等を雇用する。さらに、3) 国際競争が厳しい基礎科学の分野では、優れた研究者を世界から獲得する。世界的な研究拠点であれば、優れた研究者が世界から自然と集まる。学生の海外派遣についても、1) 教養教育であれば、学部教育初期に海外を「経験」させるが、2) 基礎科学で研究者となる場合は、専門分野で先進的な機関に博士課程あるいはポスドクで滞在し、武者修行をするのが適当である。3) 外国研究の場合は、研究対象である国に学部後期あるいは修士から、語学研修と当該国の理解、データ収集のために赴く。

一つの学問分野に着目すると、「大学の国際化」に関わる項目の全てに当てはまる訳ではないこと、関係の仕方が学問分野ごとに異なることから、表1の項目の全てを教育研究の現場に求めると、混乱・反発が生じる。

各学問分野の教員や部局には、それぞれの特徴に応じた教育研究活動の国際化を求め、それら活動の総和として、表1にあげるような項目が大学総体として実現する、と考えるべきなのである。

研究型大学の国際化

— 学術追求と国際化推進の接点と狭間 (東京大学を事例として)

第13回 高等教育学会

I－6部会『国際化』

東京大学評価支援室 船守美穂

2010年5月29日

Today's Talk

- 東京大学の2010-2020年の「国際化推進長期構想」の策定にあたった立場から、「研究型(総合)大学の国際化」のあり方や難しさについて、考察したい。

研究型大学と教育型大学との国際化の違い(1)

□ 教育型大学

- 一般には、「教育の国際化」が中心となる。
 - 日本人学生の海外派遣、語学研修
 - 学生交流プログラム
 - 留学生の受入れ
 - 学生の英語力の強化
 - 国際的な視野、国際教養を醸成する教育プログラム
 - 国境を越えて提供される高等教育 等
- 「学生への教育上の配慮」、あるいは、「学生獲得」の視点に基づく場合が多い。
- 国内先進事例： 関西外大、APU、国際教養大学 他

研究型大学と教育型大学との国際化の違い(2)

□ 研究型大学

- 一般には、「研究の国際化」を通じた国際競争力の強化といった視点も加わる。
 - 優れた外国人研究者、教員の獲得
 - 研究者の海外派遣
 - 研究の国際展開
 - 国内外の国際拠点の形成
 - 研究の国際発信力の強化 等
- 「教育の国際化」のあり方も変わる(主に大学院対象)。
 - アカデミック・ライティングの充実
 - 海外大学教員との博士論文の共同指導、共同審査
 - 海外における研究活動、国際会議等における発表の充実
 - 優秀な留学生獲得、英語による学位取得コース
 - (教員による)海外における教育活動の実施 等

「大学の国際化」の一般的認識(1)...国の政策文書から

表: 「大学の国際化」に関連して頻繁に使用される用語(国の政策文書等から)

<p>■ 国際競争力</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 世界トップクラス研究拠点 ・ 世界大学ランキング ・ 国際的な科学賞受賞者 ・ 各国の高等教育に対する戦略的取組 ・ 論文数、論文被引用回数 ・ 外国人教員、留学生の割合 ・ 英語教育 ・ 英語による学位取得コース ・ グローバル人材の育成 ・ 研究環境の国際化 等 	<p>■ 国際連携・交流、国際展開</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 国際的な大学間ネットワーク ・ 留学生交流、学生交流・派遣 ・ 国境を越えて提供される高等教育 ・ 海外分校、eラーニング ・ 教育連携、ダブルディグリー ・ 国際活動の戦略的推進 ・ 国際協力プロジェクト 等 	<p>■ 人の国際的流動性</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 教職員、学生の国際的流動性の向上 ・ 外国人教員、留学生 ・ 研究者の派遣、海外留学 ・ 海外大学学位取得者 等
	<p>■ 質保証、国際的通用性</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 高等教育の国際的な質保証 ・ 国際的に通用する高等教育 ・ 国際的に魅力ある大学教育 等 	<p>■ 国際発信</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 国際的な情報発信力 ・ 国際的な情報ネットワーク 等

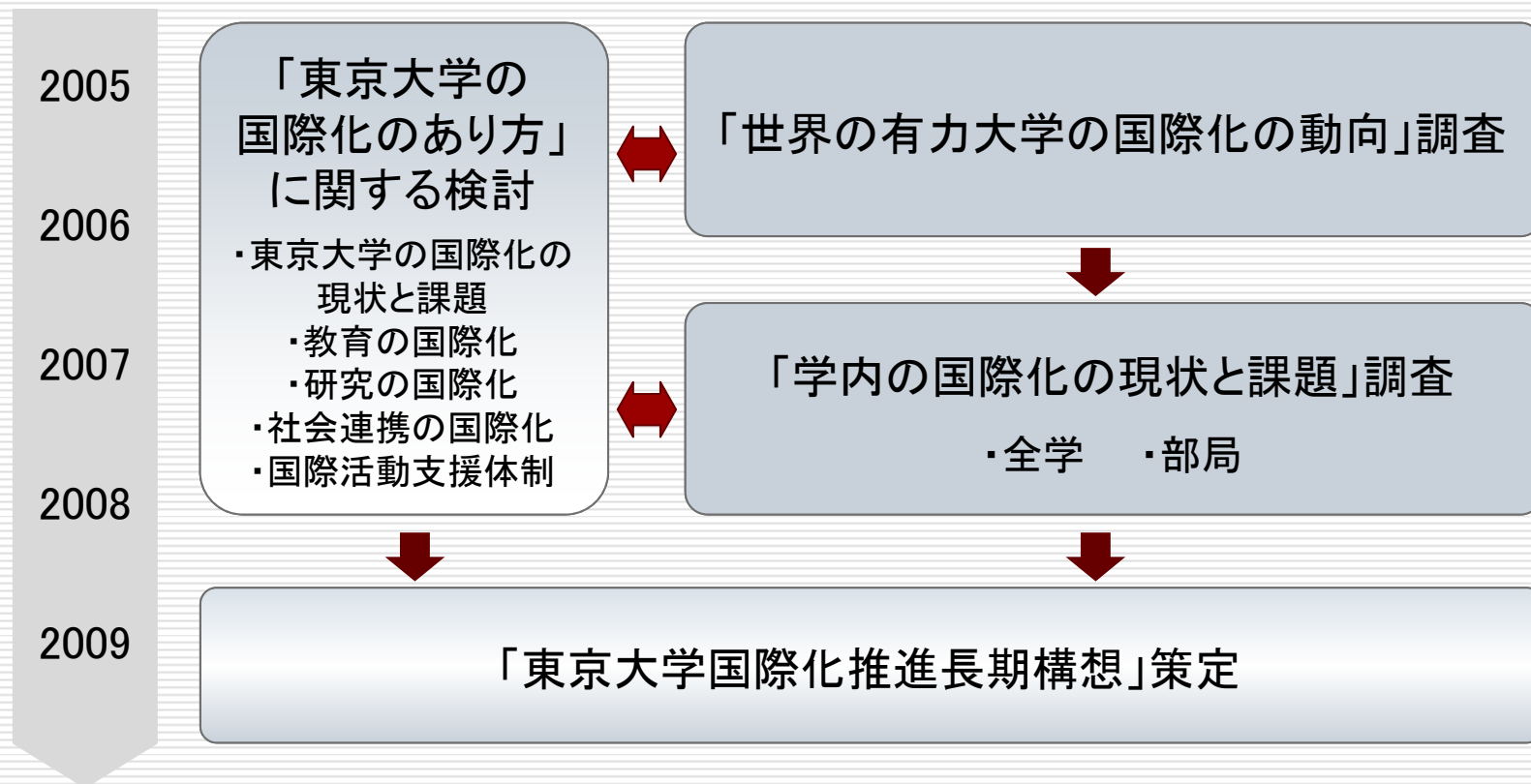
[注]用語の抽出および分類は任意である。分類において重複もあり、また、用語のレベルも異なる。

「大学の国際化」の一般的認識(2)...国の政策文書から

- 国の政策文書は、国際競争力の強化を強く意識して記述している。
- したがって、この「大学の国際化」の各項目は、研究型大学に適用可能な項目の方が多い。
 - 本来は、教育型大学が国際化した方が、国の国際化に寄与すると思われるが...(個人的見解)。
- つまり、東京大学はこれら項目を追求することが想定されている。
- また、国の政策文書により形成された「大学の国際化」のイメージが、東京大学の教職員も含め、一般のもつ「大学の国際化」の像である。

長期構想の策定プロセス(1)...5カ年の事業期間

- 東京大学の国際化推進長期構想の策定は、文部科学省「大学国際戦略本部強化事業」への提案に基づく。



長期構想の策定プロセス(2)...最終年度

- 最終年度は、執行部および国際企画部で行われていた議論を、全学の国際委員会に移し、意見招集および合同での策定作業を行った。

本部(理事、長期構想TF)

○ラフ・スケッチの提示
・問題点の抽出
・重点の置き方の検討 等

○本編構想策定作業

・部局編との整合性調整

・学内承認・確定作業

「東京大学国際化推進長期構想」(本編・部局編) 確定

部局(国際委員会、部局長)

・部局内における検討

○部局編構想策定作業

・部局内の承認・確定作業



東京大学国際化推進長期構想(全体像)

○ 本編

I. 国際連携と国際活動の組織的な推進

- a. 東京大学の海外展開、国際連携の促進
- b. 東京大学の国際拠点の充実・発展と
学術面の国際発信の強化
- c. 国際的な教育研究活動の推進

II. 高い専門性と国際的な視野・教養を備えた人材を世界に送り出す

- d. 学部における教育の国際化
- e. 大学院における教育の国際化
- f. 学生の英語を含む外国語力、
国際的チームワーク能力の強化
- g. 留学生の受入れ拡大
- h. 日本語教育の推進

III. 国際的な教育研究活動を支える学内体制・制度の整備

- i. 国際連携の組織的な推進のための本部機能の強化
- j. 留学生・外国人研究者の学内受入れ体制の整備
- k. 学内事務体制の国際的な対応に関わる基盤強化
- l. 国内外の国際的な教育研究活動のための体制・制度整備

○ 部局編 (15研究科、11附置研究所、2センター)

東京大学国際化推進長期構想(ポイント)

□ 本編と部局編を作成

- 部局(研究科・附置研究所)の教育研究活動の総体として、全学の活動があるという考え方

□ 「教育の国際化」と「国際活動支援体制整備」に重点

- これまで取り組みが遅れていた、教育面の国際化に重点。
- 体制整備は、本部主導でないとうまく動かない。

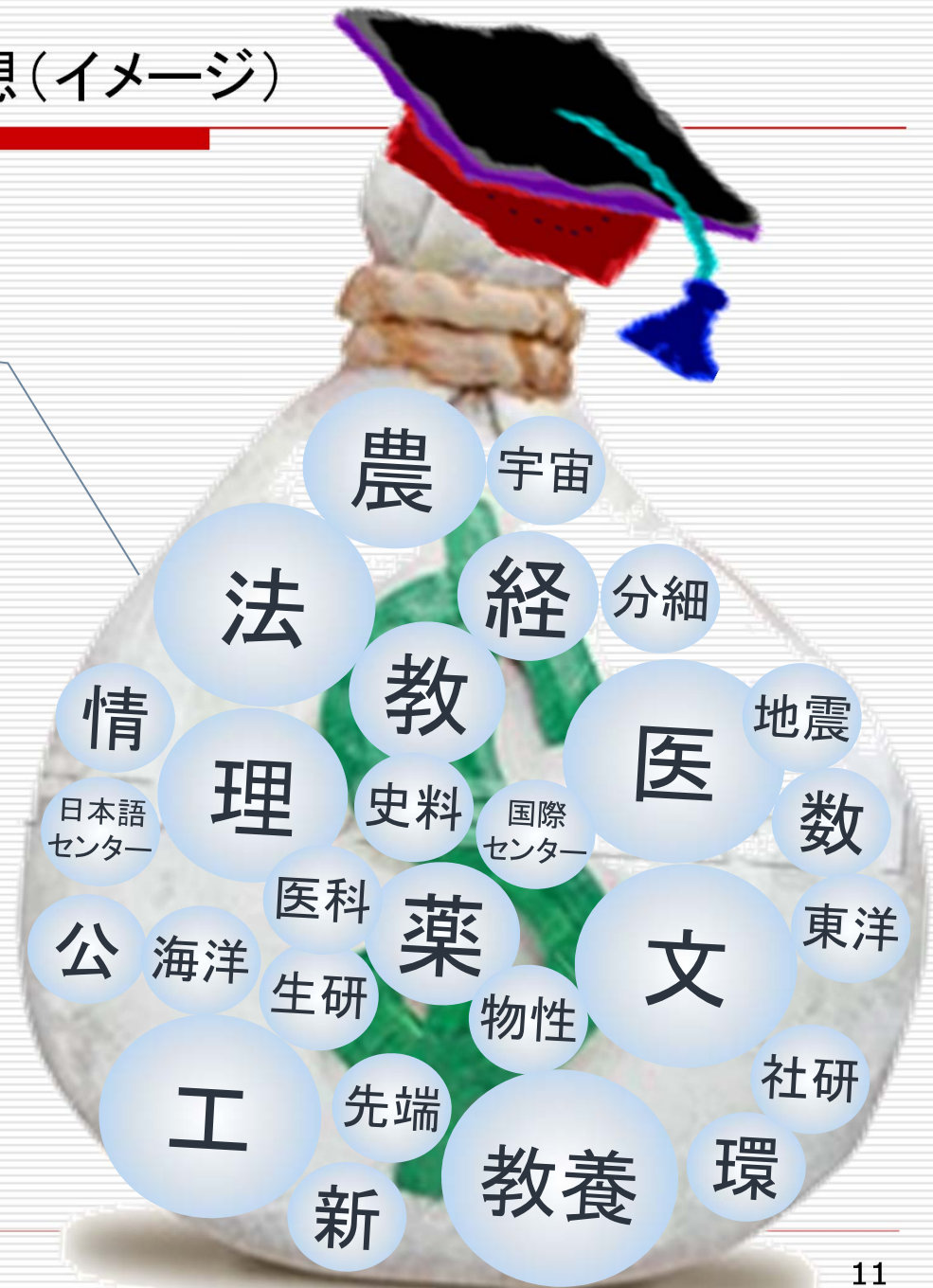
□ 研究面は、「国際連携・国際活動の推進」に吸収

長期構想策定の難しさ

- 重点を作ることの難しさ
 - 教育に重点とした場合、研究は軽視することになる？
- 数値目標を現場レベルに持っていくことの難しさ
 - 全学の目標＞部局の目標＞専攻の目標と細分化して考えていくと、実現が難しくなる？
- 多様な部局を擁する総合大学としての難しさ
- 実施主体は部局であることの難しさ
- (予算・実施体制上の難しさ)

東京大学国際化推進長期構想(イメージ)

多様な26部局の集合体としての東京大学



各部局の国際化長期構想(例示)

法学政治学研究科

- ビジネスロー・比較法制研究センターの国際拠点化
- 法科大学院のトランスナショナル・ロー・プログラム
- BESETOシンポ、コロンビア大

医学研究科

- 学部生の海外派遣(3ヶ月)の継続、若手研究者の派遣
- 学部・大学院の英語講義環境の整備
- 附属病院の国際拠点化構想

工学研究科

- バイリンガル・キャンパス構想
- 大学院講義の5-7割英語化
- 学部講義の2-5割を英語化
- 世界的に著名なトップランナー人材を各専攻1名目安

人文社会系研究科

- 多言語主義のグローバル化
- PESETO人文会議
- 多言語教育、多言語によるアカデミック・ライティング
- 留学生の専門的日本語教育

数理科学研究科

- ほぼ全ての教員の中長期在外経験の維持
- MATHEI、PRIMAなどの研究ネットワークの日本拠点へ
- テレビ会議による海外連携強化

情報学環

- 海外大学との博士論文共同指導體制
- 情報学環メディア・コンテンツ国際研究拠点設置
- 教員向アカデミック・ライティング

大気海洋研究所

- 政府間パネル等の企画・推進・支援(ICSU,IGBP,GOOS等)
- アジア諸国との学術交流・人材育成
- 学際的若手共同研究推進

社会科学研究所

- 英文雑誌Social Science Journalの発行継続
- 外国人客員教授・研究員の継続受入(年間30名前後)
- 社会調査・データアーカイブ

史料編纂所

- 外国の研究者の史料利用
- 共同利用・共同研究拠点としての国際化
- 海外における屏風修補助言
- 海外編纂機関との共同事業

「大学の国際化」の一般的認識(1)...国の政策文書から

表: 「大学の国際化」に関連して頻繁に使用される用語(国の政策文書等から)

<p>■ 国際競争力</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 世界トップクラス研究拠点 ・ 世界大学ランキング ・ 国際的な科学賞受賞者 ・ 各国の高等教育に対する戦略的取組 ・ 論文数、論文被引用回数 ・ 外国人教員、留学生の割合 ・ 英語教育 ・ 英語による学位取得コース ・ グローバル人材の育成 ・ 研究環境の国際化 等 	<p>■ 国際連携・交流、国際展開</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 国際的な大学間ネットワーク ・ 留学生交流、学生交流・派遣 ・ 国境を越えて提供される高等教育 ・ 海外分校、eラーニング ・ 教育連携、ダブルディグリー ・ 国際活動の戦略的推進 ・ 国際協力プロジェクト 等 	<p>■ 人の国際的流動性</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 教職員、学生の国際的流動性の向上 ・ 外国人教員、留学生 ・ 研究者の派遣、海外留学 ・ 海外大学学位取得者 等
	<p>■ 質保証、国際的通用性</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 高等教育の国際的な質保証 ・ 国際的に通用する高等教育 ・ 国際的に魅力ある大学教育 等 	<p>■ 国際発信</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 国際的な情報発信力 ・ 国際的な情報ネットワーク 等

[注]用語の抽出および分類は任意である。分類において重複もあり、また、用語のレベルも異なる。

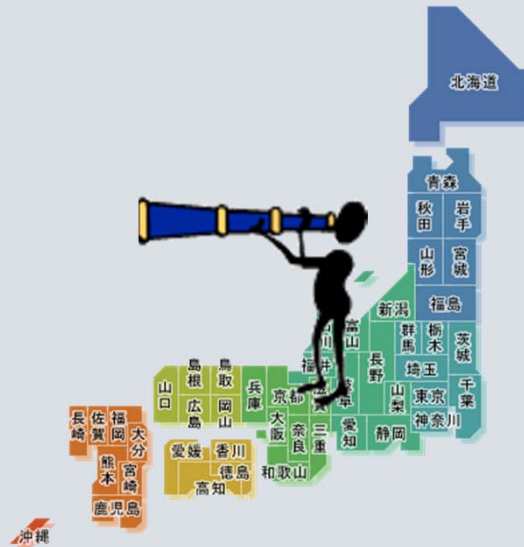
タイプ別国際化の考え方とアプローチ(1)...研究対象別

日本研究



- ・日本文学
- ・史学、法学
- ・政治学、教育学

外国研究、地域研究



- ・外国文学
- ・人類学、社会学
- ・教養

グローバル研究



- ・地球科学、農学
- ・グローバルな課題解決
- ・哲学

タイプ別国際化の考え方とアプローチ(2)...研究の実践別

応用研究(国内)



- ・法学、経済学
- ・教育学
- ・工学(一部)

基礎研究



- ・理学
- ・医学、薬学
- ・経済学

応用研究 (国外、グローバル)



- ・工学、農学
- ・医学、薬学
- ・経済学、公共政策等

タイプ別国際化の考え方とアプローチ(3)...人材育成タイプ別

研究者養成(基礎科学)

- ・英語教育
- ・国際水準の専門教育
- ・論文共同指導、共同審査
- ・国際会議発表 等

研究者養成(人文社会)

- ・外国語教育
- ・在外研究、海外留学
- ・国際比較研究
- ・新たな世界観の提示

教養教育

- ・多言語教育
- ・異文化理解教育
- ・国際的視野、教養の醸成
- ・国際性の涵養

実践人材養成(国内)

- ・バイリンガル教育(日英)
- ・外国諸制度の学習、
国内外の調整実践
- ・国内のグローバル化への対応

実践人材養成(グローバル)

- ・英語教育、コミュニケーション力
- ・問題解決力、企画力、チームカ
リーダーシップ
- ・現地実践教育、海外派遣
- ・国際的視野

まとめ(1)...学術追求の国際化推進の接点と狭間

- 教育研究を担う部局の提示する国際化の取り組みは、各部局の学術追求の延長線上にある国際化である。
- それは、各部局のこれまでの活動に根付いた取り組みであり、部局の教育研究の特性に応じて、多様な様相を呈する。
- 大学レベルあるいは国レベルで提示する国際化の方針は抽象的であり、かつ、特定の部局が全てをカバーすることはない。

まとめ(2) ...学術追求の国際化推進の接点と狭間

- 各部署に無理に単一の国際化の方針やフレームワークを当てはめようとする、無理が生じる。あるいは、現場の教育研究活動から遊離した構想となってしまう。
- 各部署の多様で、魅力的な取り組みの総体として、全学の国際化推進をデザインしなければいけないのである。



アーカイブズ

□ 東京大学国際本部のHPにてダウンロード可能

(<http://dir.u-tokyo.ac.jp/Archives>)

- 「世界の有力大学の国際化の動向」(2007年11月)
- 「東京大学国際化白書(本編)」(2009年3月)
- 「東京大学国際化白書(部局編)」(2010年1月)
- 「東京大学国際化推進長期構想」(2010年3月)

□ 連絡先

東京大学評価支援室

インスティテューショナル・リサーチ担当 特任准教授

船守美穂 (E-mail: funamori.miho@mail.u-tokyo.ac.jp)